



訓練を重ね、出水期に備える



4月27日、市消防本部屋外訓練場で市消防団水防訓練が実施されました。消防職員や消防団幹部の指導の下、各分団ごとに土のう作りやビニールシートで浸水を防ぐ訓練などを行い、出水期に起こりうる水害に備えて技術の向上に努め、団の連帯を深めました。

こどもの日は鯉恋来



5月5日、こどもの日にちなんだイベント「第35回鯉恋来」が高田濃施山公園で開催されました。会場の空には150匹の鯉が泳ぎ、子どもから大人まで、およそ1500人が来場。天候にも恵まれ、来場者はスケッチをしたり、ステージイベントを楽しんだりしていました。

駅周辺の活性化と市の魅力を発信



4月26日と27日、JR瀬高駅前広場でサークルガーデンクラフトビールフェスが開催されました。九州各地のクラフトビールや本市の地酒、本市の特産品とコラボした特別メニューや、ドイツパン・台湾料理などの世界の料理が販売され、多くの人で賑わいました。

ラッピングトラックで飲酒運転撲滅



5月2日、バイオマスセンターフランで、飲酒運転撲滅を呼びかけるラッピングトラックのお披露目式がありました。『「見逃さない」飲酒運転を見たら110番!』のロゴが入ったトラック2台が市内を走り、飲酒運転撲滅を目指します。

市の伝統工芸品で新たな門出を祝福



市では、シティプロモーションの取り組みとして、伝統産業への認知度や関心を高め、市への愛着を持ってもらうため、赤ちゃんが生まれた家庭へ、4月1日からきじ車を贈呈しています。また、婚姻届を提出した家庭には、線香花火が贈られます。(関連8ページ)

地域に根ざした温かい地域づくりを



5月14日、道の駅みやまで民生委員児童委員による啓発活動が行われました。活動を紹介するチラシなどを配布しながら、「地域の皆さんが必要な支援やサービスを受けられるよう関係機関につなぐ役割を果たす、身近な相談相手」であることをPRしました。

守り、伝える きじ車の製作技術

子どもの玩具・お守りとして

きじ車は、九州地方に伝承されている木製の郷土玩具で、鳥の雛をかたどった車型をしています。赤や黄など鮮やかな彩色が施されており、子どもが紐を付けて引いたりして遊ぶ伝統的な玩具です。雄は赤と緑、雌は赤と黒で塗り分けられ、異なった姿をしています。また、開運、縁結び、家庭円満の縁起物や、子どもを正しい道へ導いてくれるお守りとして古くから愛され、現在でも広く親しまれています。

きじ車の起り

清水系のきじ車は、古くから清水寺の参詣土産として有名でした。伝承では、伝教大師(最澄)が唐から帰国する途中、山の中で道に迷っていると、目の前に二羽の雛が現れ、光輝く合歡の木へと案内したとされています。この伝承をもとに、清水寺25代目の住職、隆安法印が井上嘉平次に作らせたのが起源とされています。



▲清水寺本堂前のきじ車(雌)



▲宮本彌一郎さんが製作したきじ車

きじ車を展示します

〈期間〉
6/11(水)~7/10(木)

〈場所〉
市立図書館ギャラリー kusukusu



選択無形民俗文化財へ採択

令和7年3月28日、「九州地方のきじ馬・きじ車製作技術」が、「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されました。その対象地域のひとつに、本市の瀬高町を中心とする「清水系のきじ車」も選ばれました。

きじ車は、伝統的な技術を代々継承する「木地師」などの職人によって作られる郷土玩具です。木工細工の技術を生かしたきじ車は、九州地方を代表する郷土玩具の製作技術として貴重であるものの、伝承者の高齢化や生業の変化によって、現在は、福岡県や大分県、熊本県の一部に継承されるのみとなっています。
技術伝承の変容や消滅のおそれが高く、早急な記録の作成が必要であるとして、採択となりました。

製作技術を後世へ

最盛期には、本吉集落に昔ながらの手づくりの「きじ車」を製作する家が4〜5軒ありました。近年では、故・宮本彌一郎さんが「清水きじ車保存会」会長を務め、清水きじ車の製作に尽力されました。市内で飾られている「きじ車」は、宮本彌一郎さんの銘があるものが多く見られます。現在も、保存会の会員をはじめ、製作を伝承された人々や地域住民の方々によって、技術の伝承が続けられています。



▲鑿(のみ)などを使って一つずつ丁寧に削っていく